

エルンスト・ルドヴィヒ・カアル

— 重商主義と重農主義の過渡的論者 —

赤 羽 豊 治 郎

一

ウィルヘルム・ロツシャーはその「ドイツ経済学史」⁽¹⁾において、十八世紀始めの最上の経済理論家としてフランスのヴォーバン、ボアギューベル、イタリアのバアンディニと並んで、ドイツ・バイロイト人カアルの名をあげ、さらにルイギ・コッサも一七二三年匿名で出版されたカアルの仏文経済学書に注目したという。

ドイツ・マンチエスターツウムの一人ヴィクトール・ベエメルトはとくにコッサの記述に関連してカアルをとりあげ、かれの名著「諸侯の富に関する概要」“*Traité de la richesse des princes et leurs états, et des moyens simples et naturels pour y parvenir. Par M.C.C. d. P. de B., allemand.*” Paris. 1722-1723. をもつて最初の完全なる「政治経済学に関する教科書」⁽²⁾といい、その大要を紹介し、進んで「パリ駐在の一ドイツ宮廷の公使或は高

官」と推測し、「すでにスミス以前に一つの科学的精神は国民科学的問題を一般的に熱心に考察するのみならず、それらの思考を方法的に構成し、かつ堅固なる体系のなかくみいれんと企てた。そのさいかれは富の本質とその原因について厳密な規定をもって始め、それから国民的福祉の促進につき多くの諸侯や政府の活動に確固たる原則を引出そうと試みた⁽⁴⁾」とさえ評価するのである。

しかもこの書は、アントン・タウッシャーのしるすところによると、当時（一九三九年）ドイツの諸図書館を通じて僅か四部を保有する有様であつた。⁽⁵⁾この状況自体がタウッシャーの再発見（W・シュターク⁽⁶⁾）に至るまで、カアルはいわば「忘れられた経済学者」の一人と称してよい証左といえよう。

注

- (1) W. Roscher, *Geschichte der National=Ökonomik in Deutschland*, Zweite Aufl. 1924, München u. Berlin, S. 376. Anm. 1.
- (2) カアルは一六八二年ハーエンロイッヒ・フランケン⁽⁷⁾のエーリンゲンに生まる。ハレ大学（一七〇〇—一七〇六年）に学び、ヘルマン・フランケやクリスチアン・トマジウスに導かれ哲学・自然法学およびカメラ学に通ず。卒業後バイロイトおよびアンスバッハの各辺境伯に仕え、一七二〇年アンスバッハの大臣としてパリに旅立つ。同市滞在中進歩派の秘密結社アントルソル俱樂部 *Club de l'Entresol* の会員として、かのダルジャンソン侯やサン・ピエール僧正に会う。その間ヴォーバン、ボアギューベル、ベッヒャー等の著作に親しみ、研究の成果が前記の「諸侯の富の概要」である。一七三一年アンスバッハに帰り、パリ滞在中辺境伯家のためになした多額の支出金の返還と復職請求の訴えを起し、遂に一七三二年ウィーンの帝国枢密院に提訴するに至ったが、結審前一七四三年七月十一日同地に没す。
- (3) この書は三巻に分たる。著者にとって経済学は初めから政治経済学としての性格をもち、経済政策の手びきとして、第一

第二巻は政策の目標を国民的福祉の増大に求め、これが達成の方途をのべ、国家の富の生産の確保を説き、農工商の基本的三経済部門の在方を明かにし公的企業に及ぶ。第三巻を財政の論題にあてる「それゆえにカアルのこの書はまた財政学の最初の教科書として著わられたことにならう」Anton Tautscher, Ernst Ludwig Carl der Begründer der Volkswirtschaftslehre, Jena, 1939. S. 2.

- (4) Victor Böhmert, Ein Lehrbuch über den Volkswohlsstand aus dem Jahre 1723 von einen ungenannten Deutschen, Leipzig, 1892. zit bei Tautscher, *ibid.*, S. 3 und H. Pesch, *Liberalismus, Socialismus und Christliche Gesellschaftsordnung*, Freiburg i. Br. 1899. S. 72 Anm. 2.

なおベエメルトはカアルに就き一八九九年ミュンヘンのアルゲマイネ・ツァイトウング一月十日・十一日号付録七・八号に一文を章す。タウツシャーはこれをグラーツ大学前図書館長ホーフラート・ドクトルJ・フェリンの提示によって知り、カアル研究に従事するに至ったという。

- (5) Tautscher, *ibid.*, S. 158 Anm. 1. それゆえ以下の紹介は専らタウツシャーの研究をもとめる。

- (6) W. Stark, *The History of Economics*, London, Third imp. 1952. p. 68 Footnote, 2.

ルネ・ルイ・ド・ヴァイエ・アルジャンソン侯(1694—1757)は「経済格律としての自由放任の著者」として知らる。マクレゴの簡潔な敘述をみよ。D. H. Macgregor, *Economic Thought and Policy*, London, 1949, p. 60-65. またサン・ピエール僧正(1658—1743)はフランスの聖職者で、ユトレヒト平和会議(一七二二年)出席後「永遠の平和草案」(一七一三年)を著わし、カントを始めその後の平和論者に多大の影響を与えたという。(岩波「人名辞典」)

二

そこで、カアルはその経済学体系の形成過程でボアギューベール、ヴォーバンやベッヒャーに何を学び何を吸収した

かを問う必要があろう。

かれはハレ在学時代すでに自然法学をC・トマジウス（一六五五—一七二八）に学び、カメラ学をオッセ、ゼツケンドルフ、ベツヒヤーやシュレダー等の思考圈において把らえ、政治経済の諸問題を効果多き独自の方式で理解せんとしたという。パリの修業もこの線上に決行され、ベツヒヤーの「政治的論策」（一六六八年）を軸として前記二氏のフランス新経済論の精華を撰取し僅か数年にして独自の体系を樹立したものの如くである。つぎにベツヒヤーとボアギューベルの経済学説の概要を素描する。

まずベツヒヤーであるが、かれの経済論は主著の書名に明かな如く、「人口多く富める国家」⁽²⁾の実現のための論策である。当時ドイツは三十年戦争で人口の著大な減少、経済の潰滅からの国家再建のため、カメラリストの経済論は人口の増加を経済発展の起動力とみ、生産諸力ことに農業生産力の振興に意を注いだといわれ、ベツヒヤーがその尤なるものとみられていたのである。

ベツヒヤーは国家の成員を二分し、一は官吏・僧侶・学者・医師および兵士の如き官庁勤務者や自由職業者をあて、とくに官吏の勤務精神を説き「国家は官吏のためにあらず、官吏こそ国家のためにあり」と論している。他は市民社会を實質的に構成する農民・職人（手工業者）と商人等いわば経済的階級群に分つ。農民は人口を増加せしめ、全人口を養い最も多数である。商人は少数市民であるが、農民が原料を与え、製作せしめた職人の加工品を売却する。⁽⁴⁾この三階級は互に依存の関連にあり、「もし商人や職人の階級が荒廃し衰亡するときは農民は農産物を売却できない」⁽⁵⁾

ことになる。各階級はそれぞれ生計を維持するため消費を行なう。ここに消費者の支出は所得を生むというシユムペーターのいわゆる「ベツヒヤーの原理」⁽⁶⁾の芽生えがある。消費こそ各階級の生計を保証し、かれらを結合せしめる主動力であるという思考がある。「消費はかれらの精霊であり、消費は三階級を互いに結びつけまた互いに生活せしめるただ一つの結びの鍵である。寔に消費のため商人は国家においてかく必要であり、農民の階級もかく多数である。」⁽⁷⁾これは商人を経済循環の出発動因とみなす。⁽⁸⁾とくに問屋制商人を重視し、かれらこそあらゆる階級を支える礎柱である。「かれらから職人が、職人から農民が、農民から貴族が、貴族から領主が生活する。そしてこれらすべてから再び商人が生活する。」ここに問屋とは一人の富裕な商人が職人に国産のまたは外国から輸入した原料品たる手段を提供し、その製品を安い価格で引取り、そして異った価格で国内や外国でよい取引を行なう。⁽¹⁰⁾をいう。そうすることによりかれらは「国家に貨幣と雇用をもたらし」、⁽⁹⁾「自然と並んで若々しい発展とともに荒地に新芽を育てこれを開花結実せしめる乳母である」と高く評価する。商人が貨幣を投下すると、「数千の人々に職を与え、そして貨幣は国内に残る。」⁽¹³⁾（チーレンチガー）貨幣は国内に残すべきであり、発展のため退蔵さるべきでなく流通されねばならぬ。「貨幣が商業（商人の手）にあるときは、それによって取引が行なわれる。貨幣は単に人民から集まるのみでない、外国からもっと多くを引寄せ、いわば磁石である。」⁽¹⁴⁾あるいはまた「貨幣が国内に留まるならばそのうえ新（貨幣）を引寄せ、公平な問屋を通じてもろもろの手工業が栄える。」⁽¹⁵⁾かく貨幣を経済発展の刺激剤とみると同時に退蔵貨幣の不妊性を指摘するのである。⁽¹⁶⁾

そこでかれの政治経済学の中心課題になる均衡理念にふれねばならない。この理念は各階級の職業組織の確立とそ

の公正な運営の原理となるものであつて、次の如く説かれる。「にも拘らず、これら各階級は互いに一は他なくして成立たず、それほど親密である。それゆえに（かれらの）最大の団体は互に混交してはならず、反つてかれらの比例（均衡）を互いに保つ如く、きめなければならぬ」（傍点原文）各職業群が互いに扶けあい、日々「人民多く栄える国」の理念に近づけなければならぬ。人民の福祉はまず一地方に始まる。「一地方の人々は互いに助力し、そして一は他に平常の商業取引によってかれのパンの一片を得せしめる。すなわち一は他の生計を助ける。」

ところが、かような階級間の正しき比例（市場均衡）さえ、その実三つの危険にさらされている。その一は独占であり、「社会の一分節のみ、他の多数の營業を独占する」独占は製品価格を引上げ消費を減退せしめ（物価騰貴）多数の生産者を排除するため貧富の差を拡大する（社会構造の攪乱）、ひいて人口の増加を制限するに至る。その二は多占であり、少数者の生活部門を多数者が占拠するをいい、「市民社会の最大の敵」であると非難する。ただし「五〇人の靴匠のすむ地になお一五〇人（の靴匠）が来住すればすべてが没落する」破壊的競争をひきおこし、競争者すべてが貧民化されるとみるからである。最後の投機的買占は需要供給いずれのサイドにおける申合せにせよ共に価格の過度の引下げまたは引上げとなる。ことに供給側のそれは独占に転ずる惧れなしとしないとも指摘している。買占は価格の歪曲による取引の自由なる進行を阻む。これらの危険はいずれも価格の不法な混乱をもたらし、市場の正しき均衡を乱す。

かような阻害要因を剪除し、正しき経済的均衡の恢復が要請されることになる。国家は各職業階級毎に、農業部門に農産物のプロヴィアント・ハウス（農業倉庫）・商業部門にカウフハウス（問屋）・手工業にウェルクハウス（工作

場）等を設置し、いづれも国家の指導監督のもとにおく。なかでも価格の決定が問題となるが、市民の最低文化生活を営み得る低水準を目標とせるものの如く、その決定にあたり、「商品の価格は委員が定め、それによって販売されるが、かれらによって追次加算されよう。かかる決定価格（公定価格）がなければ仕入商品の損失が見込めるときは予め何物も販売さるべきでない。」²³ 価格決定委員会は問屋商人の協力にまち、価格を監督官に届出かつ店頭掲示の義務を負う、とある。²⁴ プロヴィアントハウスは農産物を農民から前記の如き価格で買付け、少額の経費を計上せる価格で売渡す。この方式に従い凶作による穀価の異常な騰貴に対処することはもちろんである。つぎにカウフハウスであるが、あらゆる商品はカウフハウスのみで販売される。この組織は買占めに対する商人の対抗手段と目せられ、商人の一種の共同組合的組織である。大規模個人商人・大商社会社の営業はこの機関を通じて行なわれ、小売商人の仕入も同様な規制を受ける。この機関の営業資金は自己資金を除き、ラント銀行からの借入金で賄う。²⁵ さらに手工業のウェルクハウスはモデル工場たるのみならず、新工業のゼミナルたる役をはたす。また多数の貧困者・浮労人の強制的授産場ともなった点、かのエリザベス救貧法の労作場の性格を帯ぶ。

要するに、これらの諸施設は矢張り全国的な商業同業組合の如き中央団体の指導の下に中産市民の組合的コレギアル・システムを採用し、独占その他の弊を除き、商人の手工業者・農民との調和的協働による後者の繁栄を促進し、経済の正しき均衡的發展を通じて国民的福祉の増大を期待したのであらう。

注

- (1) ヨハン・ヨアヒム・ベツヒャーは一六三五年スベイヤーに生まれ、独学で医学・化学を修む。マインツ大学の医学教授

(一六五七—一六六四年)となり、その後経済政策の企画助言者となり、国策事業会社の設立に携わり、またドイツ植民政策の最初の提言者となった。ミューンヘン(一六六四—一六六六年)、一六六六年ウィーンに新設された商業委員会の顧問として拾年間同地に留まった。その間多額の借財に苦しみ、オランダ(一六七八年)、最後はイギリスに逃避し一六八二年ロンドンで困窮のうちに客死した。かれの独創力は経済学或は産業経営(ジャガ芋栽培のドイツ導入・石炭のコークス化)に多大の貢献をなしたが他年の諸国巡遊の見聞が学説のかれのうちに生かされてい、とくに先進国オランダの国情分析は貴重である。経済学上の主著は前記の「政治的論策」である。J.J. Becher, Politische Discurs von den eigentlichen Ursachen dess Auf- und Abnehmens der Stadt, Länder und Republiken. In specie, Wie ein Land Volkreich und Nahrhaft zu machen, und in eine rechte Sozietatem civilium zu bringen. 1668. はかかれの形而上学的思索の結晶と称せられる「道德的論策」Moral Discurs. Von den eigentlichen Ursachen des Glücks und Unglücks, 1669. があり、共にフランクフルト・アム・マインで出版され稀観書に属す。(筆者未見) 本稿はロッシェン・チャーレンチガーの引用によった。Kurt Zielenziger, Die alten deutschen Kameralisten. Jena. 1914.

(2) ここに「人口多く富める国」とは具体的に都市を指す。そのうへにラントおよび共和国がある。

(3) ロッシェンチャーは人口と国力との関連を説くに当時の代表的見解としてヴォーバン元帥やヘンリー四世の言を引用する。前者は「国王の権勢を計るはかれの臣民の数による」、後者は「国王の力と富とは臣民の数とその富裕のなかにある。」Roscher, *ibid.*, S. 274. Ann. 4.

(4) シュタントをここで階級と邦訳するは誤解を伴う惧れもある。シュムペーターの「経済学史」(一九二四年)の用語(経済的職業群)の意味で階級とした。当時セッケンドルフはシュタントを階級をもつて表わした事例もある。もちろんそれも階級本来の意味におおづばな。Herbert Hassinger, Johann Joachim Becher. Wien 1951. S. 98 Ann. 133.

(5) Roscher, *ibid.*, S. 275.

(6) J. Schumpeter, History of Economic Analysis. London. 1954. p. 284. 東畑精一氏訳「経済分析の歴史」(2) 五九二頁。

(7) Zielenziger, *ibid.*, S. 223. ベッヒャーの消費概念の解釈は本来の用法より広義であり、ロッシェンチャーは当時すでにこれを販路と解し、またチャーレンチガーは「ベッヒャーは消費とそれとともに流通を強調する」と述べ、消費は流通要因をふくむ

と説明する。Roscher, S. 275 und Zielenziger, S. 223.

- (8) ベーレはベッヒヤーの商業重視を当時の状況から判断する必要あるとし、「すでにシュレーダー(1640—1688)においてはもはや農民と手工業者をめぐる商業を巡る軸と呼び、商人はたんに両者の仲買人たるにすぎず」と指摘している。Cilly Böhle, Die Idee der Wirtschaftsverfassung im deutschen Merkantilismus, Jena. 1940. S. 44. なお商人を問屋商人、小売商人および仲買人に分ぐ。

(9) Zielenziger, *ibid.*, S. 225.

(10) *Ibid.*, S. 224.

- (11) Nahrung を食料或は生業、營業と訳し、シンネンフェルス(1723—1817)のそれは雇用と解せる例であり(スビッシー)本文はその都度適当に使用した。

(12) Zielenziger, *ibid.*, S. 225.

(13) *Ibid.*, S. 229.

(14) Hassinger, *ibid.*, S. 111.

(15) *Ibid.*, S. 245.

- (16) ベッヒヤーは貨幣退蔵の不妊性を説き、常に貨幣流通の増大とその促進の必要を強調する。これを「二万ターレルを金庫に死蔵し、(これを)六年間一枚のボロ着をもって陰蔽しかれの貨幣の没収をおそれ公衆に漏らしめまいとした一人の富者」の比喩に托して明かにし、「もし絹衣裳をもっておうえば世間に周知され、その後は恐らく商人・職人と農民はともどもその生業を・取引を行い、最後に租税収入をまじ陛下のお役にもたったであらうに。」と述べているのである。Zielenziger, S. 252-3. noch Hassinger, S. 111.

(17) *Ibid.*, S. 212.

(18) Böhle, *ibid.*, S. 44.

(19) Zielenziger, S. 226.

(20) H. Kretschmar, Die Einheit der Volkswirtschaft in den älteren deutschen Wirtschaftslehren, Jena. 1930. S. 122.

エルンスト・ルドヴィヒ・カール

⁽²³⁾ Kretschmar, *ibid.*, S. 122-3.

⁽²⁴⁾ Zielenziger, *ibid.*, S. 220, 221.

⁽²⁶⁾ かくベツヒヤーは商人の生産信用のためラント銀行の設立を勧奨したが、そのさい銀行の融資態度の分析を試み、「各人は貨幣を信用で調達し得るが、いかなる目的で貨幣を受取るかを知ることになる。けだしかれは他人に利子を支払う以上の余剰を稼得しなければなるまい」とみ、「それゆえにもし信用制度の基礎が常に利潤であるならば、かれは、おそらく受取る以上の信用を与えるであろう。」といい、信用の動態的要因なるを意識していたという。Haasinger, S. 111.

⁽²⁷⁾ かれの中産市民主義は「国家にとっては貧しい人やホンの少数の大富豪を包擁するときより、中産の誠実な市民的生業を営む多数の人々を有するときに遙かによい。」との信念から主張されている。Roscher, S. 277.

⁽²⁸⁾ Roscher, S. 287.

三

つぎにボアギュベール、ヴォーバンであるが、⁽¹⁾周知の如く阿氏の経済論の背後には一種の社会連帯主義的思想がある。

かれらは私益と公益の調和を信じ、「個人の利己心は個人をしてかれがもつともよくなし得るものを生産せしめる。そのため各人は最大の効果を得る。すべての人々がかれらがもつともよくなし得ることをなすときは、かれらにとつてまた全体にとつても最大の効果が保障されよう。かようにして個人の利己心から万人の連帯性^{ソリダリテ}が生ずる。神の摂理は自然をして事物と利益とを、すべてがおのずから均衡に達するよう整調せしめる。調和が存するところでは国家の

いかなる干渉も必要でなく、自然をして為すに委せばよい。」(タウッシャー)⁽²⁾と論ずる。

かれらの国家政治の改革的論策、またその理論的基礎となつた経済財政思考のすべてはかかる社会哲学的基調から論ぜられ主張されたといえよう。当時フランスの社会経済事情の大半はかつて述べたことがあり、ここではコルベールの極端な重商主義政策がフランス経済の台所を賄つた農業を衰亡の淵に追いこんだ二つの事実を列挙するにとどめる。その一は恣意的な重税、その二は低穀価(小麦)政策と穀物取引の嚴重な規制の処置であつて、前者はヴォーパンの「王国十分の一税案」、後者はボアギューールの経済事情研究の誘因となつた観がある。

そのためこれらの偉大な経世家は一身の利害を顧みず、この問題の解決に新しき理論の開発に、献身したと伝えられる。新理論とはコルベルチズムの金銀崇拜を謬論として排斥し、何が真の富なるかを追究し、新政策の指導理念の確立に資した。真の富とは国王のために蓄積せられる金銀でなく、国民のために人間のあらゆる欲望を満足せしめる事物に外ならぬ。「真の富は生活の必需品のみならず、あらゆる贅沢品および感覚を喜ばせうるすべてのもの」(ボアギューール)、あるいは「一国の真の富とはその使用が人間生活の維持に、それなくしてはすまされぬほど必要な貨物の豊富の裡にある」⁽⁶⁾。(ヴォーバン)といい、国民福祉は「生活必需品・便宜品および余分な富」の享有に依存する。それゆえに福祉は各人の欲望を満足せしめ消費によって得られる幸福の状態を意味し、「すべての所得、いなむしろ世界の一切の富、それが国王たると臣下たるとを問わずすべて消費のなかにある」⁽⁶⁾。

ところが、消費はたんなる欲望の満足にとどまるのみでない。「生産に意味と内容をそして正しい活動力を与える」⁽⁷⁾がゆえに、消費は生産の前提条件となる消費をまつにあらざれば、或は「消費の不足によって土地所有者・農業経済

者がその土地から得た貨物がその手に残り売られないならば、そこに用いねばならぬ諸費用^{フレイユ}のゆえに、耕作は土地所有者または農業経営者にとつてはただ無益になるのみならず、かれらを疲弊せしむるに至る⁽⁸⁾（ヴォーバン）事態をひきおこそう。これ生産物は市場で販売されねばならず販売されれば所得を生ずるからである。しかも実際は一部の稼得した所得は他の部門の生産物に販路を提供し尽くるところを知らぬ有様にある。そこでポアギュールは「消費と所得とはただ一つの、しかも同じであり、消費の衰退は所得の衰退である」⁽⁹⁾との原則を樹立するに至った。かれは当時フランス経済を支える二百に余る職業が土地生産物の結果であるとき、農業の優位を主張したが、土地所得の大半が土地所有者（大農）の手に帰した事実を認めた。このことはケネーとの関連において銘記する必要がある。また商業の生産物に販路を開らく機能を重視しなければならぬ。貨幣は商人によって流通に投入されるが、退職安居せられるべきでない。この種の構想はすでにベツヒヤーのものであろう。かれとの相違は貨幣の不斷の流通が所得形成の機曾を営む、という新しき認識に達したところにある。

元来ポアギュールの貨幣分析はコルベルチズムの反指定たる立論にある⁽¹⁰⁾。貨幣は富にあらず、交換手段であり、（目標への）道程たるものであって、両者の混同は許されていない。「貨幣は流通する限り流通と同じだけの所得を形成する」⁽¹¹⁾この絶えざる流れこそ貨幣の眞の生命であり、そして貨幣の所得形成の秘密を解く鍵をみいだす。新たに形成された所得は生産物への追加需要となり、繁栄の本質的な条件となる。それゆえに金庫のなかの蓄積を斥け（貯蓄の需要不妊性）、商人がかれの貨幣を「無用に退蔵」する非を戒めることにもなる。かれの貨幣論議はそれで終るのではない。低所得者の消費支出の美德を賞讃し⁽¹²⁾、後代のケインズ卿への道を開いたことにもなる。

かような主張は「ベツヒヤーの原理」のフランス版ともいふべきものであり、そのうえかれの頗る近代理論的発想はかれの一般均衡理論（久保田明光氏）⁽¹⁴⁾の展開において頂点に達したとみることが出来る。かれは富の創造や国民福祉の増大も価格の自由機構において立論する。⁽¹⁵⁾「富すなわち生活の必需品のみならず、人間の精神が快楽のために創出し得たすべての物の完全な享有を得しめんがためには、ある地方にそれ（貨幣）が多いか少いかはどうでもよいことである。ただ一つ欠くことを得ない条件がある。それはすなわち諸財が高価であるべきか廉価であるかどうかどちらでもよいとしても、すべてが相互的たるべしということとは絶対に必要なことである。別言すればより比例的であればその結果がそれだけ多くの商業が存する。」⁽¹⁶⁾従つてこの定義における均衡は、（一）一般的福祉のために必要であり、（二）勝れた貨幣分析の適用となるのであつて、さらに、（三）商業の自由可能性の論拠ともなるのである。ベツヒヤーは相互性を論じたが、均衡価格の構想に發展せず、むしろ公定価格制度の支持に終つた。これかれが時代に先がけ完全競争市場の構想を目指したが、初期ドイツ・カメラリストとしての境界を越える必要を感じなかつたためであらう。⁽¹⁷⁾ボアギューベールはポジチフに均衡価格の必要を説き「売手買手双方があらゆる取引^{トライフ}において同じ程度で売買し、かつまた双方ともあらゆる取引^{取引}の魂といふべき利潤のみ求むる必要⁽¹⁸⁾」を明かにした。

この比例価格はかれの社会哲学の経済理論的表現であつて、高穀価による窮乏農民の購買力の補給と眞の土地所有者の消費支出の上昇を、併せて国民福祉の増大を狙つたものであらう。それまでは「国王と大臣たちが穀価の絶対的地主であつて、いかなる時いかなる季節であらうと意のままにそれを下げたり上げたりすることができた⁽¹⁹⁾」が、ここでは違ひ。その決定について前述の比例価格の構想が示す範囲においての決定が期待されているにすぎぬ。穀価

は生産費補償価格たるべく、賃金はもとより利潤（前出）のほか地代をふくめた点は注目されてよい。シュムペーターはこの間の事情を、ボアギューベルが当時国民福祉の好転を主として地主の高所得（高穀価と高地代）の物惜しみなき支出を期待したためであろう、と述べている。⁽²³⁾

いずれにせよ、ボアギューベルが市場価格を交換当事者の双方の利己的利害闘争の結果として形成され、需要供給の均衡とやがて一般的富裕をもたらし規制者となる過程（デュボア）を説き、一般均衡の保持に国家干渉を斥け、専ら「自然のなすままにすること」の必要を強調するのである。比例価格を維持するものはただ自然のみである。いかなる権威にも頼らず、それは「行動の問題ではなく、むしろ、ひとつがねに自由と完成に向って進む自然に対して冒す大混乱を伴う行動を阻止することが肝要である。」旨を明かにする。とはいえ焦眉の危難を阻止するためには「そして直ちにこの同じ自然を放棄し、すべてかれの権利を回収し、商業を再建し、あらゆる貨物の価格の比例を確定しなくてはならない。」ここに始めて自然は自ら否定した行動の自由の権利を回復し、コルベール制度の改革を唱え、「自由な交流と公正に割り当てられた租税」の実現を目指すことになった。⁽²⁴⁾

— 未完 —

注

- (1) ビエル・ル・ペザン・シュール・ド・ボアギューベルは一六四六年二月十七日ルーアンの文官貴族の家柄に生れ、学をルーアンのイエズス会に始め、のちパリで修業し、弁護士の資格を得て帰郷し、一六九〇年以来ルーアンの初審裁判所管区総監の地位にあった。

かれは華かなルイ十四世時代のフランスの実体を鋭く分析したのみならず、コルベールの重商主義と尖鋭に対立した理論家であった。その一が貨幣理論であり、その二は税制改革に就いてであり、その三は穀物取引の自由を主張せるものであった。

(ロッシヤ) その行論は多年に亘る冷静な実情觀察に基き、当時の慘憺たる社会経済の実態敘述のうちに新理論を展開し、それまで「道德或は政治に從屬していたフランス経済思想に一つの科学的性格を与えた」(ジャン・モルニエ)のであった。またセバスタン・ル・プレストン・ド・ヴォーバン元帥は一六三三年三月一日サン・レヂュー・ド・フウシュレエに生れた。当代随一の築城家であり、ルイ十四世の寵をえ多年にわたり全フランスを巡回し、一般国民の貧窮を觀察し、その禍源を苛刻な税制のうちにあるをつきとめ、これが改革を提唱した。その結晶が「王国十分一税案」(一七〇七年)であり匿名で頒布された。

その提案はボアギューベルと同様右の如き実地踏査に基き当時の悪政を峻烈なる筆致をもって剔抉せるものであったため、遂に二人とも当局の忌避にふれ、一七〇七年二月著書は毀版・沒収・発売禁止のうへ、ボアギューベルは一七〇七年三月、六ヶ月コレーズ県プリブ・ラ・ガイヤルドに流竊されたし、またヴォーバンは当局の監視追求のうち同年三月三十日病没したという。

ボアギューベルは一六九五年匿名で「フランス詳論」、一七〇六年「フランス弁護論」(詳論の加筆改版)、さらに「穀物の性質・耕作・商業および利害に関する概論」(一七〇四―一七〇五年)並びに「富・貨幣および租税の本質に関する論文」(一七〇五年)が公刊された。またヴォーバンには前記のほか自選論文集「ヴォーバンの閑想」*Oisivités de M. de Vauban*、十卷がある。

- (2) Tauscher, *ibid.*, S. 46-7.
- (3) 拙稿「重農主義」(1) 松商短大論集 第十二号 (昭和三十九年)
- (4) Boisguillebert, *Dissertation sur la Nature des Richesses*, p. 403, ed. Daire, 1843. Réimp. 1966. 久保田明光氏「近世経済学の生成過程」(昭和十七年) 一二四頁。
- (5) Vauban, *Projet d'une Dixme royale*, ed. Daire p. 49. 久保田氏「重農学派経済学」(昭和四十年) 三二頁。
- (6) Boisguillebert, *Factum de la France*, ed. Daire, p. 282.
- (7) Tauscher, *ibid.*, S. 49.
- (8) Vauban, *ibid.*, p. 50. 久保田氏 前掲書 三四頁注(4)。

エルンスト・ルドヴィヒ・カアル

- (9) Boissguillebert, *Le Détail de la France*, ed. Daire, p. 173-4, et J. Molinier, *Les Métamorphoses d'une Théorie Economique*, Paris, 1956, p. 193-4. 坂本慶一氏訳「フランス経済理論の発展」(昭和三十年)五三頁。
- (10) ボアギューネルはコルベール主義の貨幣観を「貨幣に就て持たざるべからざる真の觀念と世上一般に存する謬見との距りは天の地の距りよりも遠い。」*Dissertation*, p. 396. (久保田氏訳文)と非難する。久保田氏 前掲書 一四五頁。
- (11) *Détail*, p. 210. 久保田氏 前掲「生成過程」二六頁。
- (12) *Détail*, p. 211. 坂本氏 前掲訳書 四七頁。
- (13) *Dissertation*, p. 419. 「貧乏人あるいは非常に零細な商人のもとの一エキュは、かれらのもとで、この僅かの金額が演じる不断的、かつ日々の再生によって、金持ちのもとにおけるよりも百倍以上の効力あるいはむしろ所得を生じ、前者のもとは後者に較べて、莫大な量の貨幣が数ヶ月または数年も完全に金庫のなかで無為に、従つて無益にとどまる、というようなことはおこらない。」(坂本氏訳文) 前掲訳書 五四頁。
- (14) 久保田明光氏「ボギューネルの『比例価格論』と均衡理論」前掲書 一三五頁。
- (15) Pierre Deyon. *Le mercantilisme*. Paris, 1969, p. 64.
- (16) *Factum*, p. 279. 久保田氏訳文 前掲書 一三六頁。
- (17) ロッシャーは「ドイツは十七世紀にはなお一人のボアギューネルをもつてできなかった。けだし一人のコルベールさえいなかったから。」と述べたことがある。その逆説はハッピヤーにあてはまる。もしコルベールがドイツの大政治家であつたならばハッピヤーはカメラリストとして終らなかつたであらう。Roscher, S. 289 ann. 1.
- (18) *Dissertation*, p. 409. 久保田氏 前掲書 一三九頁。
- (19) *Factum*, p. 329.
- (20) Schumpeter, *ibid.*, p. 278. 東畑氏 前掲訳書 五九八頁。
- (21) A. DuBois, *Précis de l'Histoire des Doctrines Economiques*, Tome Premier, Paris, 1903, p. 292. なおわれわれはボアギューネルの比例価格論のなかに私益則公益説の潜めるをみる。この説はデュボアによるとスミス以前にタッカー、またミラボーにおいてもみいだす。前者の邦文文献として小林昇氏「重商主義解体期の研究」(昭和三十年)一三〇頁以下。後者に

「各個人は自ら知るべきにして公益と利害を共にする。」といふ。Mirabeau, *L'Ami des hommes*, I. ch. VII. 1756. p. 286.

② Factum. p. 280, 286.

③ Dissertation. p. 419.

④ Ibid., p. 420.

⑤ Moinier, *ibid.*, p. 33. 坂本氏 前掲訳書 六四頁。

付記

ベッヒャーの独占・買占および多占等の市場様式の重要性を最初に指摘したのはシュムペーターであったが（前掲「経済学史」初版一九一四年）、本文執筆中参照できなかったブルクハルト・レーバーの左記の一文を最近知ったので、ここに付記しておきたい。

Burkhardt Röper, *Ansätze einer Marktformenlehre bei J. J. Becher*, in: *Geschichte der Volkswirtschaftslehre*, herausg. A. Montaner. Köln u. Berlin. 1967. S. 91-116.